

令和元年11月

青森県立自然ふれあいセンター

後藤 伸三

我が「梵珠山」 を語り継ぐ

～聞いた歴史、不思議な出来事～

* 語り部や郷土史家の話、御灯明の実体験などを交えて…

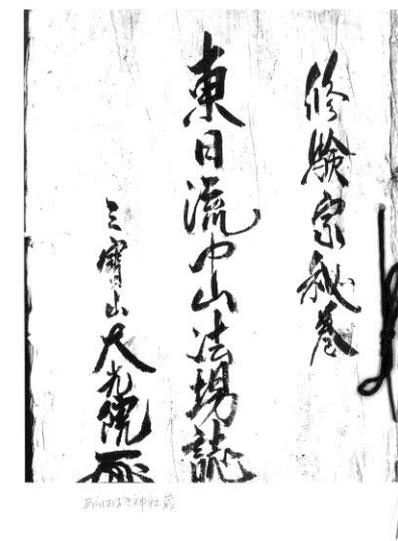
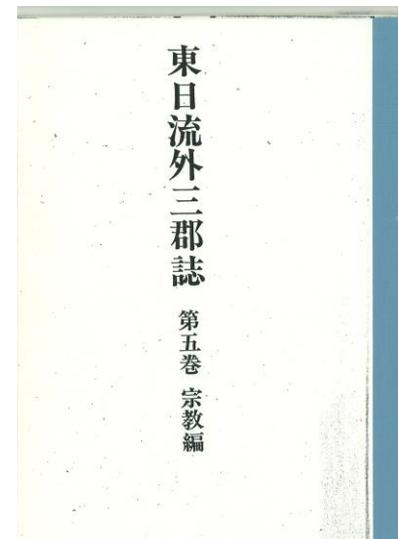
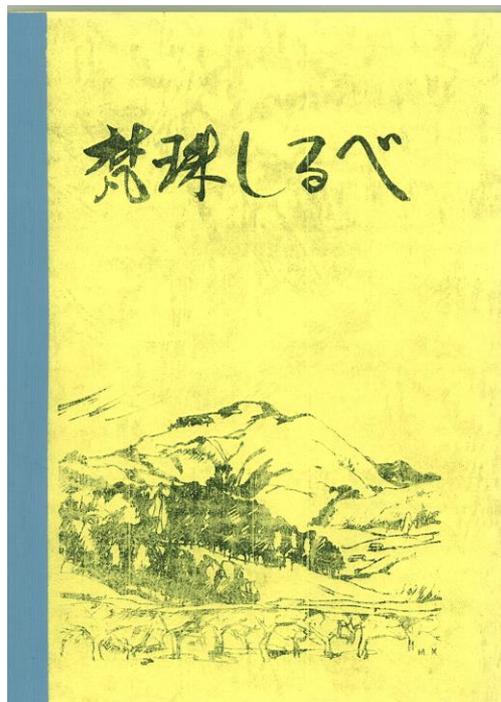
県民の森「梵珠山」

- 昭和43年、明治100年事業の一環で梵珠山から眺望山までの区域を設定(去年で50年が経過)
- 県民の森「梵珠山」の所有者
民有林105、県有林201、
国有林234、計540ha
- 県有林は、大釈迦集落の共有林を県が購入したもの
- 県の購入価格は、5,000万円。販売収入は地権者150戸にほぼ配分され、臨時収入を得た家々では白黒テレビなど購入



梵珠山の歴史に関する資料

- 昭和53年頃、RABの梵珠山系のテレビ取材に協力した際、同社須藤常務さんから「梵珠するべ」(葛西覧造、昭和11年)、「東日流外三郡誌第五巻 宗教編」(著者等不明)をいただいた。
- 本日は、これらの資料や語り部の言い伝えなどを元にお話する。





梵珠山の由来

- 「西遊記」で知られる中国の高僧玄奘三蔵（げんしょうさんぞう）法師の下で修行した道昭大僧都（どうしょうだいそうず、629－700年）が、日本に帰って仏教を広げるため全国を行脚。
- この地を訪れると、梵珠山が仏教にふさわしい聖地だとして文殊山大釈迦寺を建立し、釈迦三尊仏（釈迦如来、文殊菩薩、普賢菩薩）を安置。
- 「梵珠山」の名称はこの「文殊」から名付けられたとされる。

【釈迦の墓】

- 道昭大僧都は、玄奘三蔵がインドから帰るとき分骨してもらった釈迦の骨をいただいて帰国。その骨を梵珠山に葬ったとされており、この場所が「釈迦の墓」と伝えられている。
- 墓標の角柱には、梵語で仏教の五大元素「地・水・火・風・空」と書かれている。

【墓標の梵字】(～高野山貴島師書)

地：固いもの

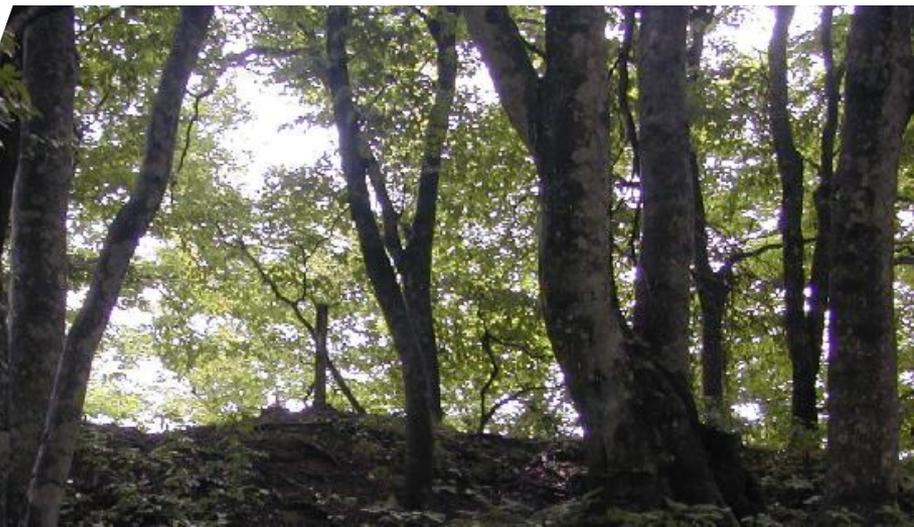
水：流れ下降するもの

火：燃え上がり上昇するもの

風：動く物体

空：空間

- この場所は、不思議なことに手入れをしていないのに草木が少ない。



【寺屋敷南広場】

- 708年、役の行者小角(えんのぎょうじゃおずぬ)の高弟唐小摩坊(とうこまぼう)がこの場所に正中山梵場寺(せいちゅうさんぼんじょうじ)を建立。
- 金光上人の事跡によれば、梵珠山には応身院が現存していたが、梵場寺は無柱の廃寺になっていたという。1217年、金光上人により梵場寺が再建されたとも伝えられている。

* 井戸の跡とされる穴が残っている →



- 1578年、浪岡北畠氏を滅ぼした津軽為信によって、北畠氏に加護を受けた梵場寺も焼き討ちに遭い、梵珠山周辺の寺もまた焼かれて壊滅したとされる。
- 焼き討ち後も地元民は仏像を安置しようと試みたが、北畠氏の再興をおそれた津軽氏により果たせなかったようである。





【役の行者】

- 飛鳥時代の634年、大和国葛城(かつらぎ、現在の奈良県)で生まれた呪術者。修験道の基礎を築いたとされる。役氏は大和国葛城の氏族。
- 「役」
役民(律令制下の租税の一種として、無償労働にかり出された者のこと。)を管掌した一族であったために、「役」の字をもって氏としたという。 (出典:wikipedia)

【釈迦堂山】

- 筑前国(福岡県)で生まれ鎌倉時代に浄土宗を広げた金光上人(こんこうしょうにん)が、1213年頃この場所に釈迦三尊仏を安置。
- ここでは旧暦の4月8日と7月9日、釈迦の後光が下りる(御灯明)と言われ、毎年8月頃青森市が「火の玉探検ツアー」を催している。
- 桓武(かんむ)天皇によって「聖徳太子作の釈迦像」が安置されたという伝説があり、これが「大釈迦」という地名の起こりともいわれる。





釈迦三尊仏

- 釈迦堂山で釈迦三尊仏が祀られている現在の祠は、明治時代、寺や仏像が壊された「廃仏毀釈（はいぶつきしゃく）」から旧大釈迦村が復活させ、それを昭和52年に再建したもの。
- 中央の釈迦像は木像で、原木のセンノキを我が後藤家が提供し彫ってもらった。（両側の文殊菩薩、普賢菩薩は明治のものと思われる。）

金光上人

- 浄土宗の開祖法然上人の高弟である金光上人は、1210年に津軽に入り1217年63歳で生涯を終えるまで津軽一円で念仏仏教を布教したと伝えられる。
- 青森市浪岡北中野地区には金光上人の墓とされる場所がある。



↑ 浄土宗のHPから引用



【梵珠山山頂】



- 役の行者小角は、唐の国に渡ろうとして701年徒弟と共に津軽に流れ着いたとされる。梵珠山に登ると「ここは日本の中央なり」として、「正中山」と名付け、中山の山々に寺社を建立しそれが津軽三千坊の礎になったという。
- 古来、ここは祈禱に用いられた場所のため社寺等は建立されることがなかったといわれる。
- 安置されている七観音は、明治時代、近郊の集落からの寄進を受け安置されたもの。



【梵珠山山頂】

- 山頂から少し下った平地は梵珠山応身院があった場所で、702年に役の小角の高弟である唐小摩坊が建立したという。以前は井戸があったといわれる。
- 鎌倉時代には、金光上人がこの寺の住僧と宗論をしたという記録があるとのこと。



【三観音】(さんかんのん)

- 昭和初期、「梵珠のバサマ」小川タケ女が付近の沢から見つけた三体の石仏を観音様として祀ったが、郷土史研究者によるとその姿・形から観音様ではなく、役の行者小角と彼に従う鬼神—前鬼、後鬼の石仏であろうとのこと。
- ここのすぐ横には、馬の神山・飯詰へと続く道がある。この道は、往古には「浜海道」とも呼ばれる主要道で、この場所は、新田地帯と外ヶ浜、陸奥湾、十三湊を結ぶ道の分岐点でもあった。
- かつて前田野目の地元民は、年1回御灯明を拝むためこの場所を訪れていた。



【鐘撞堂山】

かねつきどうざん

・昔梵珠山が栄えた頃、ここに鐘撞堂があったと伝えられている。梵鐘は、時を告げたり警鐘を鳴らす役目を担っていた。

・津軽山脈南端部から「峰海道」に入って北に進みここに至ると、今まで歩いてきた道のりが一目で見下ろせたそうである。

・山頂部にはストーンサークルの跡のような痕跡があったという。古老は山の神の土俵のようなものがあったと話していた。





【梵珠大滝】

高さは16mほど。かつては水量多く滝壺も深かったという。修験者の行場だった場所といわれる。

滝の右側にある穴は、行者の荷物や衣類の保管などに利用された。

この滝の上100m位のところには大山祇(おおやまづみ)神社の跡がある。

【松倉神社】



- 大宝年間(701～703)に法明坊(ほうみょうぼう、役小角の高弟)によって観音寺が建立され、807年に坂上田村麻呂が再建。1210年には金光上人が再び十一観音を祀ったとされている。
- ここは津軽三十三観音の25番札所で、「津軽最古の観音にして、最大の難所ゆえにその御利益も絶大」とされたという。今の三十三観音は昭和4年に新しく安置されたもの。
- 観音様は、人々を救いあらゆる願いをかなえるために33の姿に変身して現われるとされる。この神社は、明治初年の神仏仕分け以前は「松倉観音堂」であった。



【松倉神社— 磐座(いわくら)】

かつてここには黄金の五葉松があったと伝えられている。津軽三所権現のうちの一つである「中山飛龍権現」の御神体とされる。祠が3つあり、祭神は次の通り。

- ・ 多名持神(おおなもちのかみ、別名:大国主命)
- ・ 少彦名命(すくなひこなのみこと、別名:薬師如来)
- ・ 大山祇神

* 大山祇神を拜む際は、出雲大社と同じく、2礼4拍1礼で。

輝く梵珠山を目撃！

- 平成3年9月30日夕方5時頃、妻、長男と国道7号の旧道を青森方向に向かっていたところ、梵珠山が黄金色に輝いているのを目にし、3人でこの場所から30分くらい眺めていた。
- 私の妻は、この時と釈迦堂山での2回を含め3回見ている。



ロウソクが・・・

- 光る梵珠山を見てから我が家では、時折、溶けたロウソクが真下に垂れず横や上に伸びて固まるといった現象が・・・。
- それがあると、何かよい出来事が不思議と起こった。

元は普通の円柱ローソク →





- 溶けたロウが帯状に垂れて固まることも..



- 下から斜め上方向に伸びることも・・・

高野山貴島師との の出会い

- 平成4年7月頃、県自然保護課の調査に同行した際、釈迦堂山で読経する和歌山県高野山の貴島栄繕(きじまえいぜん)師らと遭遇。
- 彼らは年4～5回ここを訪ね8年目とのこと。
- 目的は、釈迦の光「瑞光(ずいこう)」を拝むこと。
- 師によれば、瑞光を拝めるのは国内で和歌山県以北に3カ所あるという。

念願の「瑞光」

- 貴島栄繕師は、京都駅前の医院のご子息で、京都大学医学部生の時バイクで事故死したが、火葬直前に蘇ったことから仏門に入ったという。
- 3年後の3月20頃、貴島師はついに瑞光（写真：寺屋敷北広場から釈迦堂山～9:30頃貴島師撮影）を拝むことができ、念願だったチベットに寺を建立。



石塔山・荒覇吐神社

(せきとうさん・あらはばきじんじゃ)

- 平成5年、貴島師が荒覇吐神社に行ってみたいというので案内。
- 「東日流外三郡誌(つがるそとさんぐんし)」(真偽両論あり)において、高野山とも縁のある役小角が「701年石塔山に葬ず。」とされていることを伝えたところ訪れることに。
- 石塔山では巨石が神社の周辺を不規則に囲んでいる。

* 写真は、現在の状況



和田喜八郎氏 と出会う

このとき初めて、「東日流外三郡誌」の和田喜八郎氏と遭遇。

和田氏は最初警戒していたが、私が県民の森の管理人であることがわかると、彼が国有林の管理に携わっていたため仲間意識を持ってくれたようだった。

その後、貴島師は和田氏の案内で役小角の墓といわれる場所（神社南側の山中）で読経。



神社に保管されていた巻物や仏像類

- 私を信用してくれたのか、和田氏に頼まれ、この神社に年間何日も通い、保管されていたおびただしい数の古い巻物の陰干しを3年以上手伝った。
- 作業は春と秋の乾燥期に行い、1日20巻ほどのペースで干した。その数は全部で300巻以上になったと思う。
- あれらは全て彼が書いたものだとの話を聞くが、彼を知り、書かれている中身やあの分量を直に見た者としては、彼の手によるものだとはとても考えられない。

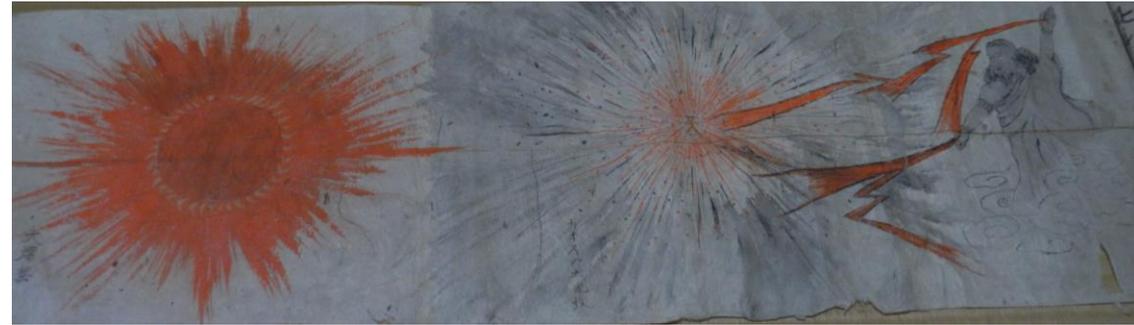
期和
平賀族 宇池利賀志王
貴無津賀奴王也示妙
方伊沼沼貴利己族阿
志岐化奴王宇賀夜只呈
越及會津西國長三毛族
俱奈久志王無奈賀利
王也故東國熟族宇
久流岐王津武王平賀
岐王宇志摩王伊止利王
加賀奈和志王荒久流王
宇土岐王久毛荷王差池



巻物に書かれていたのは



明徳
物部
東代百廿七五三三
昔事
北魁自流鬼國不知火至
高砂國列島大邑西南
稱倭國東北稱日本國
本州西流手魚川東流
天龍川以流帶國境
為國城住人自古昔



巻物は広げると幅30cm、長さが3m位で、細かな漢字が書き詰められていたり、見たことのない文字や絵図が描かれているものも数多くあった。

聖観音菩薩像

- 以来和田氏から荒覇吐神社の大祭に、10年間くらいだったと思うが毎年招かれるようになり、その際、珍しい仏像や仏具などを譲り受けた。安東水軍による大陸との交易品とのことだった。
- そういった珍しい品々が神社横のコンクリートの倉庫に大量に保管されていたのを記憶しているが、ほとんど盗まれてしまったそうである。



西王母、東王父
(中国の最高神)

あるとき和田氏に、なぜ私に譲渡するのか聞くと、私であれば県外に流出する心配が無いし、行く末は大釈迦の元光寺(当時私が総代長をつとめ建設中だった)に寄進すればよいだろうとのことであった。



分怒尊
(ぶんぬそん～
チベット)



青龍大権現像
(水の神～中国)



釈迦涅槃像
(しゃかねはんぞう)



三蔵法師像



銅像
(チベット、
名称不明)



弥勒菩薩像
(みろくぼさ
つぞう)

- 山形県善宝寺の和尚によると、「国宝が数多い奈良県興福寺に同じ座像があった。」とのこと。



香炉
(ヒスイ〜中国)



掛け軸
(作者、年代
不明)





東日流外三郡誌では

～荒覇吐国と石塔山

BC660年頃、筑紫日向（ひむか）族（九州）の王（後の神武天皇）の東侵に敗れた安日彦（あびひこ）王と長髓彦（ながすねひこ）王が耶馬台一族とともに東日流（つがる）に到着。

内乱で中国からのがれて来た晋の一族と、先住民であった阿蘇辺（あそべ）族、津保化（つぼけ）族とともに荒覇吐（あらはばき）国を建国。

津保化族の聖地であった石塔山で国王即位の式が挙行され、安日彦が初代王、長髓彦が副王となった。

701年12月、役小角仙人がこの地で護摩火壇中に入り往生。

安倍家と石塔山

昭和62年7月、自民党の安倍晋太郎氏が、妻洋子、晋三氏を伴い荒覇吐神社を参拝。

晋太郎氏は、安倍家のルーツは奥州安倍氏であり安倍宗任の末裔にあたるとしていたそうで、宗任が同神社に眠っていると聞いたことから足を運んだ模様。

因みにこのとき画家の岡本太郎氏も同行していた。



洞窟の発見

平成24年頃、和田家の文書
保管者からの依頼で調査

↑三身洞の入り口 → 『東日流外三郡誌』の記述とお
口。人の手によりの場所に見つかった幻の洞窟
る枠がはめられ「三身洞」。入り口は土砂で埋めら
れている。れ、隠されていた。



←『東日流外三郡誌』
(北方新社版)に記
述された三身洞の図。
今回の調査では、奥
の仏殿にあったとさ
れる仏塔や仏像は見
つからなかった。



古代津軽王国の宗教施設か!?

「東日流外三郡誌」に記された 幻の洞窟「三身洞」が 発見された!!

昨年5月、幻の洞窟が発見されていた!
真滴すら問われ、古文書が示した
「三身洞」をきっかけに、
津軽古代史の研究が新たな局面を迎える!

●東北異聞 ● 文||松雪治彦 写真||齊藤國良

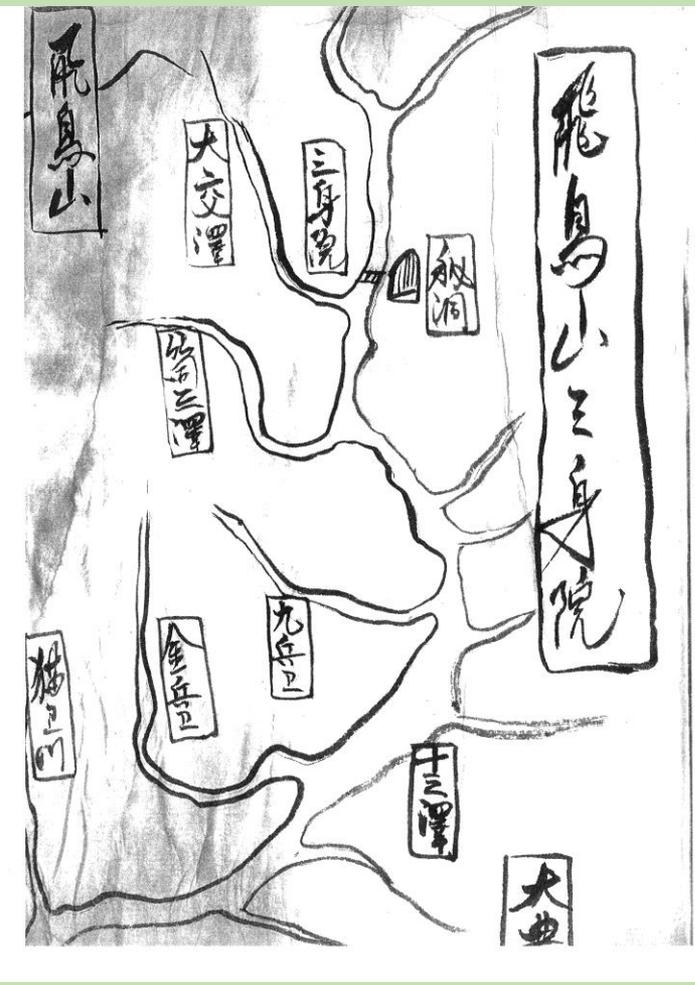
埋められていた
三身洞を発掘

青森県で郷土史研究を続ける「新・津軽風土記を創る会」の齊藤國良氏から、驚きの情報が寄せられた。なんと「東日流外三郡誌」に記された幻の洞窟を発見したといふのだ。

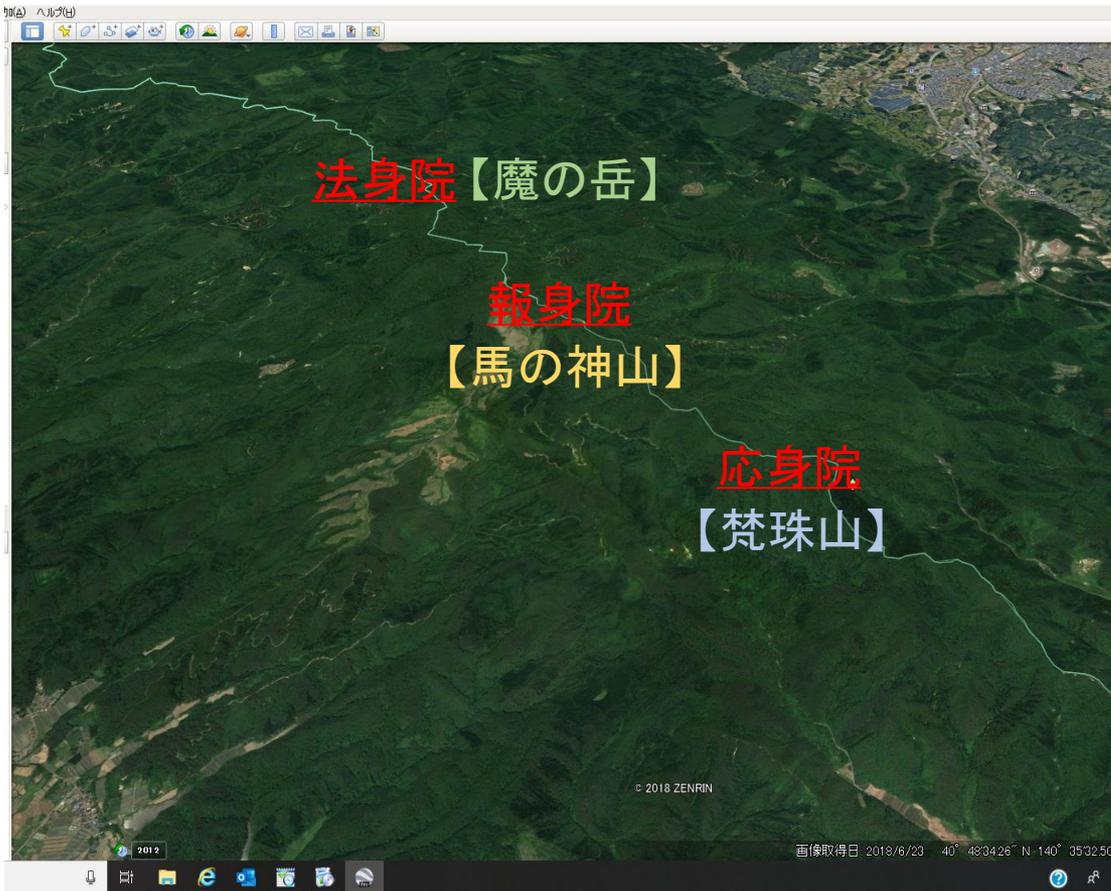
「東日流外三郡誌」といえば、その由来や記述の真偽を巡って日本の古代史を騒然とさせた古文書である。原本は公にされなくなつたが、写本をはじめとした資料を保存・管理する後藤伸三氏を中心として、現在も記述の調査が進められている。今回の洞窟調査隊一行も、後藤氏の主導で組織された。

齊藤氏が発見したのは、地元でも幻の洞窟として伝えられてきた「三身洞」。これは「東日流外三郡誌」の宗教編(版によっては「信仰編」)にその存在だけは記されているが、現地調査によって場所が特定されたのは今回が初となる。

調査中につき詳細な場所は明かせないが、「三身洞」は古い林道を徒歩で1時間以上下り、さらに沢沿いの溪流を1時間遡った深い山中にあったという。捜す者を迷わせるような記述に振り回されながら、一行はようやく「三



← 雑誌「ムー」の原稿



梵珠山から魔の岳

梵珠山から魔の岳にかけて唐小摩坊の弟子らによって数多くの神社・祠堂が建てられて梵珠千坊とされ、阿闍羅千坊、十三千坊とともに津軽三千坊と言われた。

〈修験宗大光院(飯積)の属院〉

■ 梵珠山

応身院(おうじんいん)

→ イシカ(天の神)

■ 馬の神山(まのかみやま)

報身院(ほうじんいん)

→ ホノリ(地の神)

■ 魔の岳(まのだけ)

法身院(ほっじいん)

→ ガコ(水の神)

【荒覇吐→天・地・水の神】

終わりに

- 梵珠山が昔から信仰と深く関わっていたことがわかりただけなことと思います。
- 梵珠山ゆかりの道昭上人、唐小摩坊、法明坊、金光上人という4人の高僧が伝えた仏教ですが、その教えは「すべての人が本当の幸せになれる道」だといいます。
- また、東日流外三郡誌によれば、アジア大陸北東部由来の民族や国内の民族が融合した荒覇吐族を祖とする安東一族は、人の上下を造らず、人の種別を嫌わず、戦を好まざる民族だったそうです。
- 梵珠山を訪れた際には、豊かな自然環境を大いに味わっていただくのはもちろんですが、仏教の聖地とされたこの地で、時に「七観音」や「釈迦の墓」の前で心静かに手を合わせ、古に思いを馳せながら世の平和などを祈っていただければ、より豊かで安らかな感覚に包まれてお帰りいただけるのではないのでしょうか。